

様々な形態で存在する水そのものと、水と人々とのかかわりを水環境と定義し、都市における水環境の役割およびこれからの水環境のあり方を考察する。

水の存在は過密の都市部においてオープンスペースを作り出すとともに緑と合わさった自然環境を創造し、さらに都市景観の要素ともなり居住環境に潤いややすらぎを与える役割をなしているといえる。

水環境は基本的には水の存在形態・規模により分けられ、また、人々と水との関係は、その利用目的・利用形態等様々であるが、都市部における代表的な水形態である中小河川・水路は、昭和30年代から40年代にかけての高度成長時代に汚染が進み、都市機能追求や表面的な都市の美化の名目により、整備されるどころか暗渠化されたり廃止される例が多くみられ、失われた水空間が多かった。昭和49年に江戸川区の古川親水公園が廃河川を再生し、地域・街区規模の親水施設として全国に先駆けて完成して以来、地域の居住環境向上の一つの手段として水を媒体とした親水空間の役割が見直されるようになった。その後、昭和60年代以降急激にその開発例が多くなっている。

都市における水環境と人々との関係の中で、景観も含め水の存在を意識し、より親密な水とのかかわりを造り出そうとするものを親水施設と呼んでいる。都市の中での水環境の役割としてはこの親水性も重要な役割の一つと考えられる。そこで、本研究では、都市生活と水環境の関係を親水性に着目し、特に周辺居住者の評価意識からこれからの水環境のあり方を考察する。